

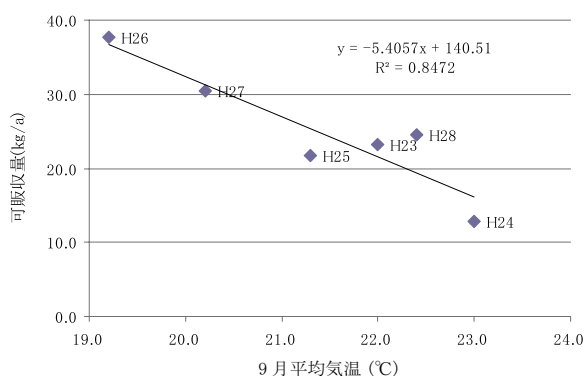
# ベニバナインゲン「常陸大黒」の簡易な収量予測法

農業総合センター山間地帯特産指導所

ベニバナインゲン「常陸大黒」は、収量の年次変動が大きいことから、収穫期前の収量予測法の確立が求められています。そこで、ベニバナインゲン「常陸大黒」の主要着莢期である9月の平均気温と可販収量の関係性について評価したところ、可販収量は9月平均気温と高い負の相関があり、9月平均気温が低くなるに従って増収となる傾向があることを明らかにしました。

## 9月平均気温と可販収量の関係

ベニバナインゲン「常陸大黒」を現地慣行である7/10頃には種した場合、主要着莢期である9月の平均気温とa当たり可販収量の間には高い負の相関 ( $R^2=0.8472$ 、 $p=0.009$ ) があり、9月平均気温が高い場合、収量は低下する傾向がみられます (図1)。



ベニバナインゲン「常陸大黒」

図1 ベニバナインゲン「常陸大黒」の9月平均気温と可販収量の関係

注) は種日 H23 : 7/12 H24 : 7/9 H25 : 7/9 H26 : 7/10 H27 : 7/10 H28 : 7/8、栽植密度 : 83.3 株/a  
アーチパイプを利用した2条植え栽培 (アーチ内うね間 180 cm・通路部うね間 120 cm、株間 80 cm)

## 収量構成要素と可販収量の関係

収穫莢数と可販収量の間にはやや高い正の相関 ( $R^2=0.6777$ 、 $p=0.044$ ) があり (図2)、収穫粒数と可販収量の間には高い正の相関 ( $R^2=0.8666$ 、 $p=0.007$ ) があります (図3)。一粒重及び可販率については可販収量と明確な相関がみられませんでした。

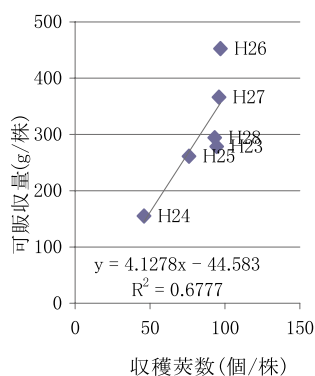


図2 ベニバナインゲン「常陸大黒」の株当たり収穫莢数と可販収量の関係

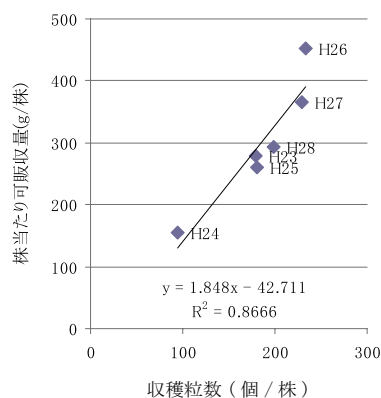


図2・3注)  
耕種概要は  
図1注記と同様

図3 ベニバナインゲン「常陸大黒」の株当たり収穫粒数と可販収量の関係

## 実用化に向けた対応

ベニバナインゲン「常陸大黒」の県内における栽培面積は4.4ha (H28) となっています。可販収量の簡易予測法の普及と併せ、栽培管理技術の体系化と現地導入を進めることで、生産・流通体制の安定化を図っていきます。